



小坂哲作品集
「Goodies Vol.1」
2008/4/1 ¥1,500

1. Angel
2. Mornin' Blue
3. Remember!
4. 花
5. Come in, Mr.MURDER

たまには自由にやろうかなと

●小坂さんといえばこれまで主に作曲・編曲に携わってきたわけですが、今回自らヴォーカルを務める作品をリリースされました。これは『満を持して』という感じなのではないですか？

「全然持していませんよ(笑)。他のプロデューサーが一段落して時間ができたので、たまには自由にやろうかなと」

●2007年には演歌のアレンジを手がけるなど非常に幅広いジャンルを操る事ができるわけですが、今回収録した作品は元々の好みに近い？

「自分一人で制作するので、自然にそうなりましたね。やっぱりこれまではボーカリストやバンドの性質を生かす事を第一に考えて曲を書いていましたから。特にスプリング★フォー関連のプロジェクトなんかは六十年代とか七十年代風にする、という配慮が必要だったわけです。その頃生まれてもいないのに(笑)。それはそれですごく勉強にはなるんですが、気付いてみると好きなのに何年もの間やっていないジャンルなんかが出てきていたんですね」

●ズバリ最も好きなジャンルというのは何になるのでしょうか？

「ブラック・ミュージック系統ですね。今回で言いつつ『Mornin' Blue』の Soul や『Come in, Mr.MURDER』の R&B、あとはラップもそちらの文化ですね。それ以外にも Funk が大好きで、今後にやりたいと思っています」

●それと同時に『Angel』『花』では激しい感じの Rock もやっていますし、爽やかですね。「聴き返してみるとすごい振幅幅ですね。」

他には Prince くらいしかいないかも(笑)。でも私にとってはごく自然な事で、普段聴いているものも両方のジャンルなんです」

『作曲家』であるという意識が最も強い

●ところでこの作品は『ミニアルバム』と呼べばよいのでしょうか？

「表紙にある通り『作品集』です(笑)。まあ位置付けが難しい事は承知しています。一応ミニアルバムですね」

●5曲入りとした理由は？

「身もフタもないですが、労力的に適度な期間で出せたから、と言っしかないですね。元々は3曲のシングルか10曲のアルバムかしか認めないヒトだったはずなのに、全然自由にやってみました」

●『作品集』と呼ぶのは何故でしょうか？

「やっぱり私はライブステージの真ん中に立つタイプではなくて裏方指向なんですよね。そして楽器やエンジニアリングなど色々できるうちでも『作曲家』であるという意識が最も強い。ですから自分で歌を入れていてもそれはあくまで伝える手段であって、ただ曲そのものを届けたいという事で作品集と呼ぶ事にしたんです」

●タイトル『Goodies Vol.1』の意味は？

「普通は核となる曲の名前から取ったりしますが、今回は前述の通りのコンセプトなのでなるべく地味な言葉にしよう。Goodies というのは単に『良い物』ぐらいの意味しかありません。実は Goodie となる『偽善者』みたいな悪いニュアンスもあるらしいですが、それも丁度いいかなと(笑)」

●ジャケットがシンプルなのも関係あるのでしょうか？

「その通りです。自己アピールしたければ歌っている写真をダウンロードと載せまさらね。たまに趣味で CG をいじっているの、無機質という意味で使ってみました」

●久々に『打ち込みまくり』です

●個々の曲についてお訊きします。『Angel』

はシンプルですね。「ライブでやっている形と基本的には変わりません。でもベースをこんな風にしたかったんです」

●スライドが多いようです。「こんなニュアンスがすごく好きなので、自分で弾きました」

●『Mornin' Blue』は一転、気怠い感じで。「長年作曲をしています、初めて三拍子の曲を作りましたね。相当歌うのが難しくて苦労しました」

●ほとんどの曲にファルセットがあります。これが一番顕著ですね。「これは山下達郎氏の『MONDAY BLUE』という作品のオマージュで、元々そういう趣向なんです。ファルセットを織り交ぜて歌うようになったのはスガシカオさんの影響もありますね」

●間奏のギターはリズムと全く合っていないが……「わざとです！ ジャズやフュージョンのバラードはこんな感じかなと」

●『Remember!』は初めてラップに挑戦したとの事。「昨年あたりからこういう曲を沢山聴いてみて自分の中に蓄積ができてきたので、試しにやってみました」

●よく見ると全ての行末に工夫があります。「ヒップホップの世界でも韻をどれぐらいたどむか色々流派があるようですが、私は韻多めが好きなので頑張って書きました。ラップでしか得られない気持ち良さというものがあるので、今後もこういうシリーズを続けたいです」

●バンドのライブでもやっているそうです。「再現できません(笑)。ラップと重なるのでメロディー部分は別の人が歌っていますし、生ドラムではアプローチが違ってきます。CD収録なら何でもできるので、キーを上げて自分で歌って、リズムもハウスっぽくしました。この曲は特にこだわって、久々に『打ち込みまくり』です」

●『花』はセルフカバーですね。「作品集という事で過去にうまく作れた曲を入れたかったんですね。今回は自分の声質も考慮しつつこれを選びました」

●アルバムの中で盛り上がるポイントでは？「私の中では5作品平等ですが……この曲はストリングスを使わずに荘重な感じにしたかったので、色々試した末にコーラス隊とホルンを選択しました」

●『Come in, Mr.MURDER』はボーナストラックとなっていますが。「これは2007年に書いた推理小説の主題歌で、本来一体となったものなんです。しかし現在のところ小説の方は公開する気がないので、オマケという形です。制作時期は他の曲も2007年〜2008年なので、サウンドのクオリティなんかは全部同じレベルです。この曲に関してはアレンジやメロディを楽しんでもらえればと」

●最後に、Vol.1という事は……「勿論 Vol.2 の制作を予定しています。やってみると自分一人というのは楽で、夜中の0時に空いた時間があるな、となったらすぐ歌のレコーディングにかかれますからね(笑)。今後は他の予定が入っている中でも続けられそうだなと」

●どんなものになりそうですか？「今回の5曲ではまだ自分の全てが収められていないので、更に違ったタイプの作品を作っていきます。実は3〜4曲はもう何をやるか決まっています。昔のストックや今回収録を見合わせたものなどがあるんですが、でもアレンジとレコーディングに時間がかかるので、とりあえず半年以内が目標ですね」



小坂哲
1982年生まれ。東京都「里園」区アデCブキ
2000年頃から「スプリング★」の秋田アロの
「どこも」なマトチユブ多数。現在、
「北部」のティス制作。現、
「ユード」の★担当
「ボー」